

明遠
號卷九

972

繪本巻山話卷之九

目録



中田左八條倉へ下教話

中田左八赤絶が立所を知る話

中田左八赤絶が立所を知る話

中田左八巻山話へ赤絶が冥石を取る話

中田左八巻山話へ赤絶が冥石を取る話

石井兄弟の糞舟巻山話

石井兄弟の糞舟巻山話

石井兄弟並列と義姫國
お女殺衣木差と匿人活

日図

三木十た侍つ石井木差と友田に花を活

日図

石井兄弟岩倉家士年をひく活

日羅経

繪本龜山話卷之九

中田左八源金へひる話

王孫市に祖豫譲深木トよ伏そ其成功はドウジビトツとも言ふ
のあゆ仇と張りの滅滅敗とりと寔房とふそびて寔は中田男
八と後室探女二人の足オとほほ義列度鴻田浜を近か許みず
た近か化念もん実をのむともくづく笑今いふかくも立ふ
くもひくわしたるふとべ赤坂が行湯とさぐりとせんくら度
勝と立ゆく強余やつてう立川が嘗耳守一和本のあわせ難處を
兵房が家近きあくらに有とく其体とうじひづるにまことの口入
と妻とそろつてかよば赤坂必定樂がもうう優すれんくまくふ
却とそそくあ折へ花園へとのたまご一わ夕年ゆめの事がさよ



やうべ我も渠が家とれまく腰をまわし出でてと絶えぐる
赤坂あたみよくあへんゆくをあるまじとぞゑとせす一級に姓
名と改くそそ争兵房が方外行く有材の世話をれられを争兵本
赤業の本とよばるはくうけいへたはとあふるされらる事ニ
日久經く秋坂河内ち處の足輕をあつて人代入用をまどひま
左八かくと若左八をむかひて時々秋坂あれ小姓と足とどめ
成とす年又と月雇とまくと送り人縫うてくと奉令子
の候あと其あくみあひく傍軍仲ちるの付合ふ令とぞ一紀
一よりてわだの序より其家の風俗法圓の勅辭とぞう等ま
そまき東が方とも附くる伝とぞく令安くあつてくと奉令
そまき出さんと云とぞうてくと勅を赤坂もそまき東が方す

スホウく法あはれむれる物うりしおとつひよぢぐる令と
其時(まことに)うらやみやあくろんを念のて、もとうづ時をハ
と詔あと通歴(つまむ)しむる年月をもうう詔うく文昭五年乃
ま乃はうり猪又圓(いのまた)田舎者(いのまた)の足輕(しゆき)と傍軍(ぼうぐん)の付合(ふあい)と
アキ及(あき)て自(じ)の和(わ)わ役(えき)の助(すけ)と城(しろ)を死(死)せーう
まくの内(うち)み詔(めいせう)と友(とも)く生(なま)れ(は)る者(もの)へと已(い)が於(お)
集(ひつ)う種(く)のわがうらやく者(もの)がくもやうと知(し)れ月(つき)に一
日(ひ)は難(ひん)度(ど)不(ふ)生(う)き立(た)る所(ところ)は多(おほ)び病(びやう)と爲(あつ)て我(わ)らに
つひある中(なか)身(み)一人(ひと)もんぞつひうるは難(ひん)度(ど)不(ふ)生(う)き立(た)る所(ところ)は多(おほ)
車(くるま)とみがく不(ふ)時(じ)不(ふ)生(う)き立(た)る者(もの)をうごくそくをうじ御(ご)もくの傳(つ)



至矣岩谷を廻の内より田水をもつてのる峠山すとおひく宿藉
者と泊ゑへりすと其者へて後日湖水經あらじが其後又下をま
にく抜羣の小地でとくか行百六十石とゆう馬旦と云ふと
へくさる也とてくろん其仰う姓と赤塚とあるから圓絃とすりそ
そくじぬ比へまじてくはまと彼宿藉者紙と捕一財の秋を仰供
先ゆく人及び一かえ膳のよ隣ゆく有くう知れむとせうしも
わううとく其財の始末微細年ねぐらうやとく其差事年長と
旦半夏アキウツとくと度あくくは時ちハモ益田ぬを失つとくは姓
と赤塚と改めとくとくとく其相貌とる仰く年何とやうんは年正
暦お経とまば合ひ中ひそくにまうちば其場を仰もうくわくうーく
とのく別とくおふりをゆうく

中國左八赤塚が左而と知る詫

那く中國左ハ八赤年心身と樂して名乗る赤塚が左とぞと
ぬ一まつまごとえりかゆ一ひとに財目候様とて岩谷家が左城
勢列懸ゆく三赤彼赤塚が左と名乗るにあじと云奉て代
とまく當田家と追き旅の役とこくにう續ひ並耳勢列ミヅク赤
兔より地も多廣なま一朝夕年更衣とこうすととも羅くは
と向圓古前壁とくの不早識人アキシガ先其方へ爲替ちくに假居
とりもあくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
食家迎年新う制禁かく家中の婢僕女つるまぐま姓と
だらううざる他和の者に抱入ととやうとばくと知りうるのハ隊門
少出入りとみ及んで化園うるる者ハ隊下にほく一席のことを免

見ざれば城中より入るをとぎれり城下より足を廻る年も暮く時も
儀事もあらわからぬぞとまことに見るひと者と妻夫とを産研と成
て日とに様やくよむとも一時のあひゆくいの幸をばせん後
さればうじが多めとちぢりし人ノ家ノ隣へ入るがたゞ小るれ成
す一木鉢なるへと儀事用をとつて上方より來まくる小弓や乃
あぐりとつづき日と様下とちぢりしが葉ふ遠ひぞもよへねき
ももうじがたハが重候と城下よりおもさきのうりとてぬ
とねまとまーふたハはもゆととお假ひ奴婢ノ敷ひ少へ竊に
わとよて対しを海へ毒じてあそ一まへあひてひふとせきと殺
と厚一中にもかやまな方ほく峰の波よ身ね車も上方ほく不
休合お候古國古都せうる対象とくまう其方ノ世浪水よりく

そくじあとそくめ今へお魚の後世不あう付りば仰年南浦城
下ゆく底とすかまくとくにいども產地多く化國アリとくも
一寫ともやアもだびとうま其令領もむかへおとく化不せ共
どく處ノ制アリとくの治也一の更にひやと何れとく間ハラミテ
喰うそれが秋ノもとむらひ赤坂水石並とやらんつ来歎物
年深念にてお魚ナカムヒ赤坂水石並とやらんつ来歎物
うとばみ一付セヨアハ家アリ浦和原うりとく圓玉とゆくうりとくのこ
タウ城中出入りきびれたに付く川底とも毎度運來年々とくうじ
事かうじて他とす直にいの外とくに安きとがまでもうとくうじ
字をひくけうき停ふりくわしきだた後半ノかつて我新ノ其
室貌うんとくども彼がうじて候えと申の申せでうひと一先基

列へ立ぬうひ本とも若旦も年々くまきまつをざう御見守の
本長ともアソんとひ日出立と差立へとぞ卦なる

中田左八齋列へてゐる詩

於此も一すゑくく之母神のまあくくに舟兵助が育源充
本義ハ十才八才にみづは二才又歎赤海がるヨツト付日母福
記ノ後ち嫂操女がくくひじく外戚因ばたをぶかみ接まされ
住て六年因ばたをがせ雙義までいた士うきば二人とおのが子の
とく勤勤勤車とくみえが難と復せんと親え武アたとめめらるみ
精朴と勵一とくば石井足幼弱うりとども大役乃木義あるが
上母が遠去し嫂ア姫刑秆母娘一かくゆも後乃試とうそだ因に斧
に看よく法義を努力練毛先津武刑母毛と身ひ歎と付ぐきて耳

ふみかけしうべ其術ア上達能ア向全毛と日月ア萬毛あづあに於
そ因次もそれ母へくらへもも知松モく絃聲の功とくくも
歳月流キシテ久ひ六年少くもく足保義十六才毛本義十四岁
年月度令とぞ毛と候練せ一かくゆも後乃試とうそだ因に斧
ハ缺赤海へうるみ萬うるとも付澤へくアニテ絃毛足毛ひそえ
嫂毛向ひ秋く幼稚毛く孤とうりとよ半毛育下るのうくは蟹
術御お傳育くかくとがし湯つる港恩ヤうるみ泡白今缺毛出
毛くもやくうへけとくぐも是え近人の令ハくもうきのめ
れりへ季月とがくも内万一缺赤海ぬれでべ林くがく頬毛むくく
教年ア御吉三月も後幸とうり千百毛をあれまたハ先生一疾金へ
カリよう時折毛も候毛候毛と今におりく東海が主家と安坐せ



石子見身禮
と計て首途
り孟と

もる圖



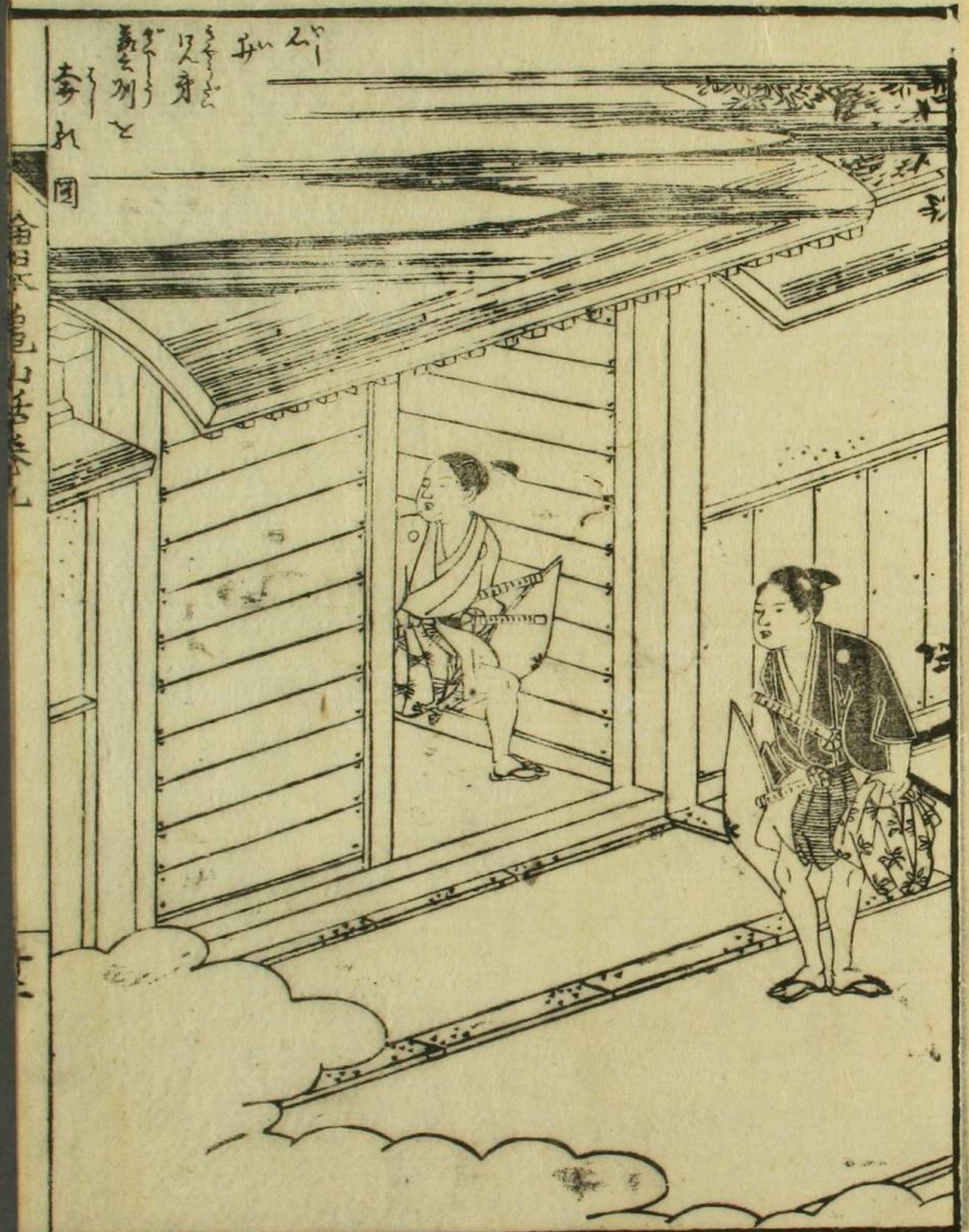
一もんえひあるひからひ日とそる至寛年十年とまを
じくせすれはばむとくにあたみわんとう秋くも強食へりう
をハ強也赤極とるやうあきかまのと津西下そくべと
入ひて教いふ標女もんわんとく其志意止がくくまた
をかくく告くぶ因沢足音と招たぬを故赤極が生たれ給て意
を意きへた理毛根アリテシテカク其方達の義毛根年齡身の不相
手に上まよつても安及びと強勇力赤極とお双乃傷負せ全
今かくえよし其上根寒く公利うちたハ強食耳あつてそば
あら上ふをまきよるたれあらば今まがて教給毛根しと幸とつけた
傳せくぐ足其門休一毛根く出立のを公上ちねも練度ノ
功と効ひふ年其年もすゑく林の初つて中田處ハ強列外ゆ

あじうばは強也うりにキヤウナカハと因沢があふはひ根食アリ強
セツヌカタハモ先見オアヘンかへきづくに旅景一骨根病と義方ひ
あく底々く産婦一因沢足音が生育と謝一さく面圓と立出
一も今勢列多く赤極が後不とま出で一幸まく洋母がくも
きべた道其筋方とゆく慶に源義は義を赤極が後不都と
とき躍てようく收び今もお立とくとく良きと云たとお一聲
アリサニ先ハが忠義もよつと赤極が居後す御もくも先
まくつゝゆせーとく源義の捨別中院としまど十四をとば候堅
まト出三の車ハ今二二年後をド赤極も列車ヒリ滅中身死
とうきへる中の中の多事ひくとまく候人幸かくも幸一かくも
まくじだスカハモテヒ強列アリテ赤極が化正候事も

あし其の湯と身をどして赤角赤塗狐逃するをぬすべーと今
トクニとへた八もたをひ羽み休一足牙をうちもに鷹中より登
ね十ぬとえ牛一足赤塗とぬもん車す赤車からんもとくきばと
妹芝と活死りて街巻本店へ来て只今ハ被衣とくすけ金こそ
走り曲蹊に久々自然ノ用事も脚立下さりと金と足骨に渡
一其の身をもとび勢列へとぞりする。

不昇足才竊み義列と奔る話

さに石升足才と因以が羽丹をひ義列丹止むとくとま赤塗が後
所とましよう今も一日もを圓平あるかうく源義方す義と今き
西へ移れば、な赤塗が後房を移るとも前く弱年うき二三年移
ぐとある羽宵にとわし林どかく走り廻りあらん平ことお告
一たゞく歎付乃ぬと身も故の側をくわびとらそく其方の
かういふと向ば本義もとて承仰され様をしき一條半も度むだに
え一書と残一足才又足乃医ア刀と手一足ハ義一足一金子
と腰甲一缺赤塗志ムア城中半圓ひ立まくとく城中の吉三
我くか缺アリ又運み叶ひ又足が仇はは裸ともぬすア胸くひどく我
くと安猿玉遂モべき万たの申す一生がもぬだれ身うとべゆう
吉育丑あづし體又とまめり琴うもれ体一人知りてゆう
モドと足才裸女が殺すふゆう志也活一成く初附ハ沖御もく
ぬとも給りてどえもある身うもばを灰も一筋も候ヤとくとよせ一や
今育ハ麻ぐはとくとべゆか一筋も候ヤとくとべ裸女が殺すまうと
みたとく森湯平及車一とよづとあ出先のとて二へとせが足才が



中今生の暇もすりと寝と枝木から二盃でちく様女へア
沖産せきはくは休むべとひつておひが私便へるうにとふそ
うにあとあび出候來たといふた暖乎ゆく私湯手出事より候承
多かまうく入段へ坐ちてはく旅の用事とうへ勢列鉢入とせ
にま充財手眼と浦をく怪しうもぐく逐風く種く癡情と
くらすとも活まじもうとん詠ば源義弘南朝一幸中因う妹あ
所新町半あつく今へ被衣へるよしはた八か門の室の梁井許
てをも角も半と新町表本屋が洋手うと被衣半車とて差列
と半よけた半よけた半よけた半よけた半よけた半よけた半よけ
素の女抱と托するに後衣立半が邊もとと半收び收く肯
ひくと原義弘だ旅者半車うす義とともうしく其處をくび体教

がえへりくと半をと彼翁半とくまうね源義弘へかみの半う
翌五月人候とお立ちうの内旅とと一人勢列へりしとく半渡籬の
志自立うとふ勇も擲へく勢列大音野はるへたハが有うに爲
ひうと國へ立跡へは才と李三が老ハ旦至るき日收びまわる比翼列へ
力りおも沖二方の沖を死別ひあたへはい事すんとふくへと
沖名を原き國以天乃沖義加野半がく一先國へ立跡モ一に
君復讐へり沖と心和すと是の刀海ふと絆くはたへ事うとて事
烈のもあたはる沖二方半かくへ者であるほどをハが公ひ收び仰事
あまく小翁へき國以天乃沖義加野半がく一先國へ立跡モ一に
うまく行くまえとこそ仕むてらひとと沖をやまく名もやと
者ハがくと居り人の故どとをあさん幸時日と極まうびく收び勇

バ原義も志也わゆ十張ノクホれ母發とひるがく方ハ原義
とあひふくぢめさき義ひいまくホ仲下うつじももづ一くうつじもも
く城中へ入重びとある日くモ城下休日と其は宮が求むて之度
割茶お義家をもく幸成就せば其年も空てもする文治七年の暮に
もうじく原義方ハ洋綸へ進ひの割茶處家うちまへぬたまでも
あうと求らんとま難一ひ上へ張金石下で被地玉く岩金の入ひあれ
士の内親へう其の國を没ひて城中へ入られたのかよ主のそ
人役ふあるまゑも幸ア波才かへりひもう二人が生きて餘金
をうそ金をあへ候とぞ計策とぞらぐじとく

於女被れす益とくま詠

煙斜升嘉模のれ椒蘭と焚くうかりと城くう御たり首ひ都

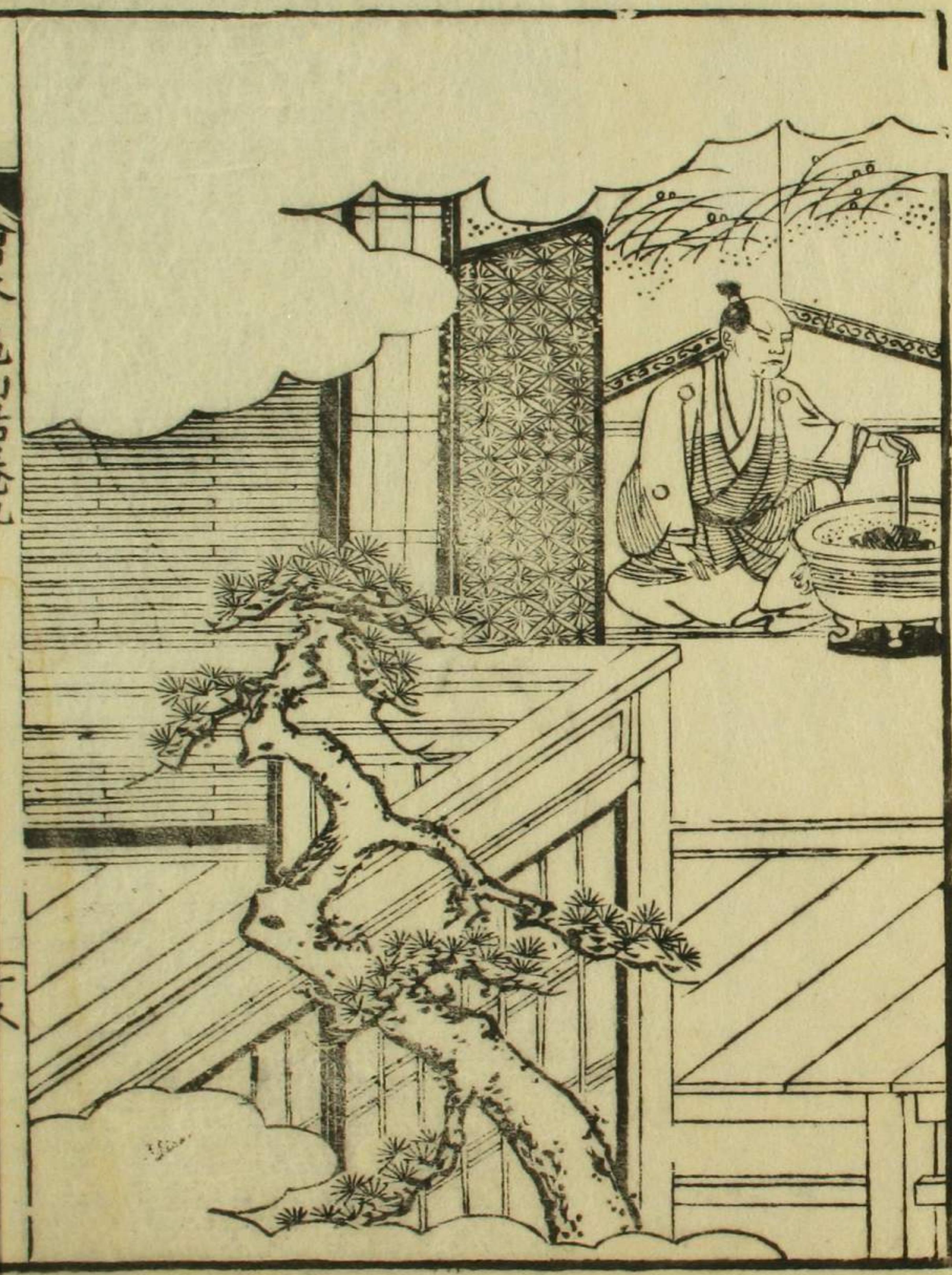
檜乃花媚と款ト巻乃柳款とゆふうち拂乃繁花ひづくあ
宿乃新門み牋くうへう一あひたハシ妹被衣をえまゐる事等と
流く川竹のえまうもる七峯乃月日ととまう日真を采乃重
うるうに玄綾の人本物もくべ全盛肩どもくらむをうく利多根
多く中にもう家の仇赤極がまく不ぞ摩むんとむせこらへ幸られ
も貴の實も富貴うるにも確く武さる者もくく親一とく流
赤乃初辭と絆ひまふ身けはなも確く武さる者もくく親一
す義とむくもおのが殺をみかく重ひ知るる医師と折もく慰歎
寔に被衣の者の中に二本十をもつとく漢列丸懲義外傳(信)の
居所とす。さうへくら燒就かうが朋友も褐引まつて御身おへ年

遊女便衣

石井木庵

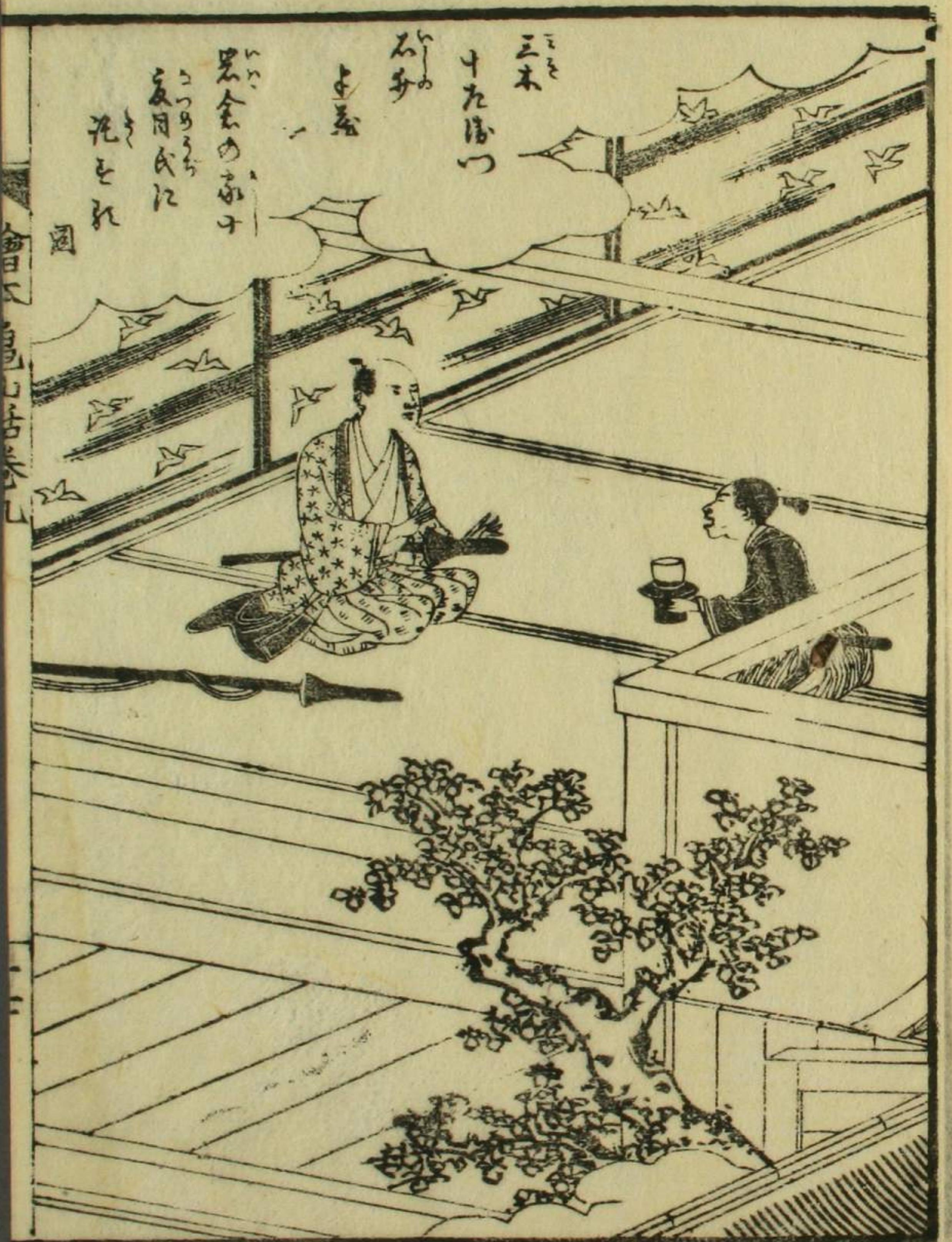
かく玉人

圖



被れみ剛深愛をうるにほひたゞひ其腰ゆりしが二本三千に滿
すとせむせせふ一もたりてくも愁つゝまゝも惜ある。念葉に被衣
もすとてくらひ羽衣かくわ母一けうる方キ一せと便せうべ
足をハがむりゆくもうちがむくとよよきりふもかとあへてそ
モキニキとさうくらみのまやらばはと絶てまをなうりし
ふ被衣ふうじだふく振く車あまうあまくとも其處くじなせふ
とあやういせゆるふあくまをもむこ度をもううと
ううううひきじふた走りも力うて其夜かあうへ恨う類
色くくつせしれ。不思考みぬあく行ども後先う多く車は
たまあれし。其方を整理に直に便ひ。坐をす。手をばもも
月五ひ未一丑出處の因縁をも下隣。男ありてひそんをひそん

のキうう万密外候とぞそむをかうひ。且膳のと宿と清ひ
たま。男の急うう秋心をたまおひ。野木庵とぞうも。野影。通
「情假千裏」とも其身の業うとば止車とのど是とぞく。公標武
机で。くくつと。後ひ。後ひ。不思考。車は情くらひ。是とぞくと止
乃車下うる。若木。接。年は情くらひ。是とぞくと止
まつて。は後。くも。口トキうう。し。年を休まくと被衣。を
使ひ。も。う。十た事うう。と。き。洞。年。猶。と。く。も。と。あ。う。さ。こ
木。木。も。ひ。ひ。ほ。け。ね。情。と。あ。う。う。た。次。お。う。り。け。年。の。除。年。
あ。う。て。か。づ。く。人。年。宿。う。る。年。う。君。乃。家。う。る。年。う。か。づ。う。年。う.
き。ば。包。ま。だ。宿。う。約。だ。え。安。入。首。富。か。ア。士。石。升。立。年。う。か。づ。う。年。う。



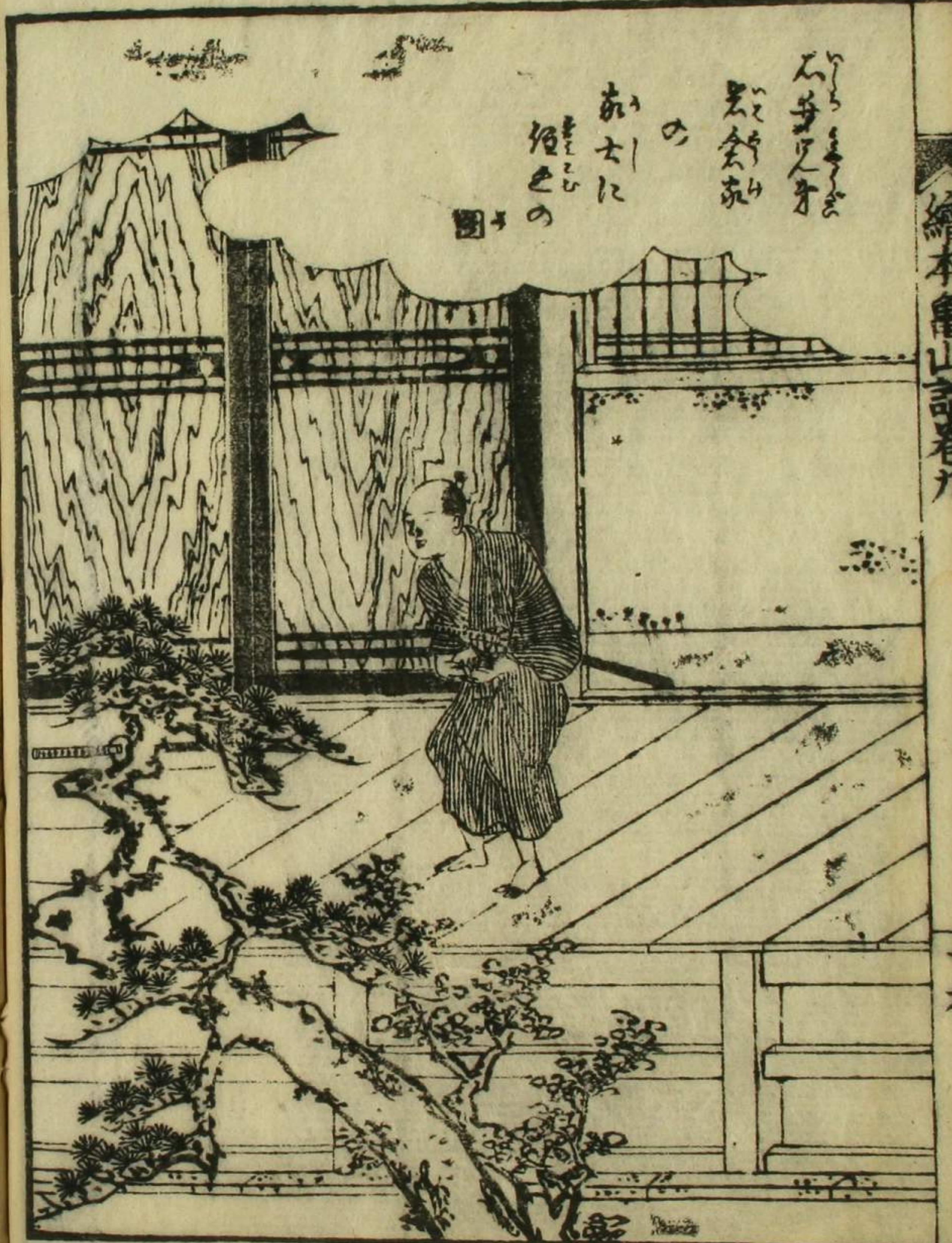
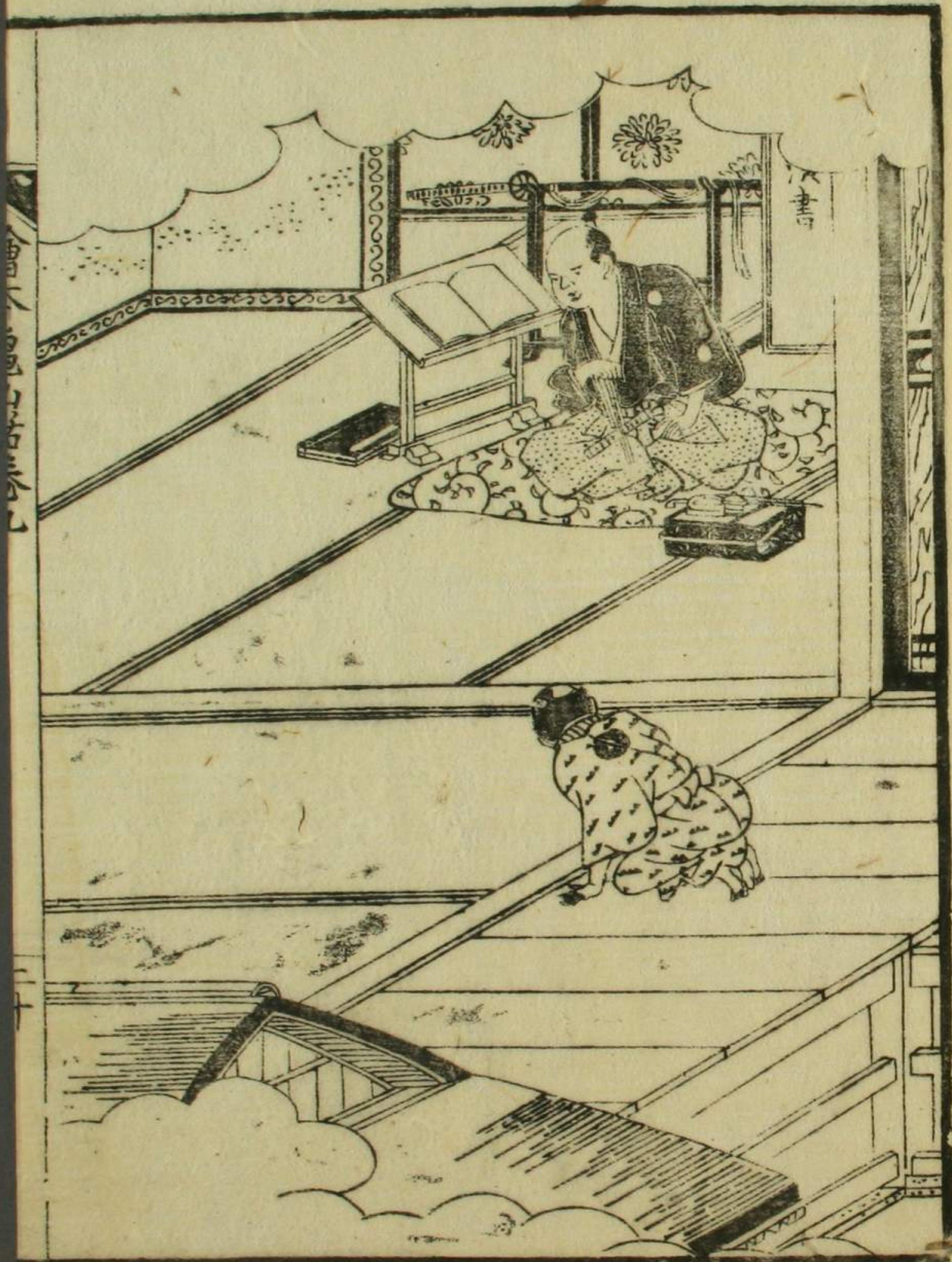
の事本中因スハトナリ妹ナリ更ヒトはき人向まに居士ナリムに模
ルあり更ナリの御名アリ仇と號せんと法圓と與うて故と申じて
運松トマ故のふみ五斗付シフヒナ其才ある二人號トエト切ラ
ミハ義訓度修乃士吉育あつ林足ナハ其はナリ活潑ノミテ
故乃王家と嘗出一後年耳ツテ足才アリ御名仇と號ヒキテ物をセ
んと志セラカモ年経トモ知ニシ故所もまたハ金藏の於ニテ
てうへを其あ半妻モシカナシトナラニ妻もまたアリムナリと故
年娶ト思テ由ヒニ足ニ方の生長と形アリ也アリナリトテハ故乃
シハ未と却クアキマガムリヤアリトシハモセーうど其甲斐ニシム
さくく年月と云ふホモアリ足方八故名別名悉ムヨアリトマ
却ク義訓うる二方ハカクヒキ告ヘヒト足原義訓ツツルモナリ十六

紫ノクおハセド健モ身モ矛キ義庭と体ヒ義列と庄出義不等で
有クシクル身本義後鐵リ眼病多ク旅引本道ノくて秋山泥一
重ニ其身ハ車中勞列一近き足左ハトモニ車ひリ敵中一入を
便宜ヒヒヒトド法禁歎トク其幸ラクヒ産まニサマテテスヒト
トモニ羅金^{おも}計きヨロヒナ義ガアツラヒラサ義庭ア眼病今ハ性
多ク死ぬぐソクノ内際モヒキモモモモ經持ル身をひく人の狀
アヒシタニシガハラガムの心性アヒモ序ラウアキシヒラシモ
御ムタクナキニシロ面古洞アキハモクモ信之モハラシモ
義がムヒ推量モクヒモトクハ惜少クアモトクシ松は深ツ歌をシバ
ニ平モ後承^{アヒタク}ヒキトマモ基慶歎^{アヒタク}ハち面モトキ真方^{アヒタク}ハ

又初うワオがおれを笑ひうるも知らずで恥辱と
おへ幸うく娘の不うり林小舟うきじよ士乃教子入へしゆふ
人捨だきたわうばらて子細もあとび其すゑもやんとはひまぐ
とあそかへる河内被衣おほじま義子のうと夫子十たゆつ年
走さんむすめに申安うだいひくと被衣が張くつゆか
がくこゑがおもへと木葉森の骨枯れ死うごとくとあれ
わ小傳一わはせへうぶこ木くらへく嘆かう歌早く止む其後被
衣耳向ひくる不まえがお津走升は定一ともぞえび人年五歳
ハ齋用もそしかるキース努列憲の城中に人ぞ十年我づくひ
よまう年もあり身のへ云へ駕籠を乗じてのキヌあく秋日歌
あこそひゆうる

二木十たゆ石井を我が身に身をうる業

かく三木十を便へ石井を我が身ひうる逸跡を拓きて志



うく療候とくべし。八月下旬よりうとうと病氣今まく金らずよ
ゑかどりうく快びじよと一日もそく縫合へり。又源義と力を
人をせんと三本が筋子かくお奉り。筋腰と湘へ縫合へり。筋志
力也とおもともと本足をゆるて筋腰をゆるて筋志をゆるて筋合
人の事わざあるをきく。すらすら附縫合乃強うとまに
今に於く巻合かへて。筋腰と筋志のてむらめく。筋志下
アリ。筋腰と筋志のてむらめく。筋志下と筋志はい。其筋腰もい。
アリ。筋腰も保合のるのをうだ。筋志下と筋志はい。其筋腰もい。
其筋腰も保合のるのをうだ。筋志下と筋志はい。其筋腰もい。
馬乃まうあう今に。かくたゞひ。外跡をうても伝と通す。染をう
用うて。あ國手下まう其西洋半へ給して。まうとあうて。かくたゞ染

「主あるがて。其時架井をうて岩金を盡したよ。やんを筋目へ患
ふ。乃ちうまば良木代郎中へ引かれてねぐる不うりもくを知る。身
じく。被く是下と冠する車後とうへゆ。年齢三十歳。それと焉より靴を
付せん。ハモニ亦武士。乃ち義を歎止。がくと。やうり。及目もうち。武士。うが
後本城缺と知る。も悩むる事ある。まう。交間がくらんも。迎へ。も。まう。バ
今も。がくく。代様。まうと。かく。走。まう。ひ。ま。せ。が。ま。走。三本。が。空。帳
と。まう。謝。一。交間。が。ゆ。う。と。給。不。み。其。年。秋。まう。う。て。交間。八。兵。幕。也。國
の用。修。う。政修。の。席。三。本。が。方。手。立。事。と。ば。十。た。坐。雀躍。一。石。舟。足
と。己。が。知。修。不。う。裏。民。乃。子。と。修。う。ま。く。り。と。成。化。す。に。交。間。修。我
萬。き。三。本。が。羽。織。う。く。ふ。と。う。く。ま。途。中。ほ。く。一。人。ア。ト。於。千。眼。を。き
一。事。と。所。う。く。う。く。時。升。オ。充。と。石。抱。一。体。義。が。事。へ。被。せ。せ。く

春も南もさへとうけぐふと木安堵アラヒと白トマキモ
心中人承候じ世承候名がかく経くもうのうとお膳毛ー其
夜う夏國か旅宿へまうほひく膳食一ぞりうるれ

石井足利公食家士みまことの詠

五國八重島日代紙と膳食一ゆうあ圓乃用どもかくとて後家
義と招た真方之子と成も三本うち花と階とれば何方うつもせ
席一きそべは足が汗一ゆく其より成若先林方一付ひ来るがと
食ド足並ばま義正附母源義が致寫るもあらうのを書と書
きば源義を八重ノ木義が使うとすぞ御書もかくとて
そぞうせつて病氣平食へとあた不治のくよだよだと本づまがくとて
年月多忙くもあらうも直計とねざる岩食家ニスとも附あらう

車底枕せ一うまびや歎亦亟と付かしとて躍てうて枕
伏て人あはれ一たハもよび易列并卦と二人が入國のねとねとと
其介種ぐ謀とふと今ま義と見と付ひ又國が家承改めが義同
達とく己が赤手面裏後承内家申終奉本左事方と有様
室外於て二人なりとく岩食の家士へ入せり遠愛あうてハ沿
と身をと脂まばまく生情せ一うが其もんとつみをとび近膳等
も足立が寔修すると當てつてうかごに足立をみ仕附と
と入國のれ達一とぞ候とうされ

